

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【柏崎小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	
思考・判断・表現	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> ・基礎的、基本的な知識技能の力の定着 <指導上の課題> ・基礎的な読み、書き、計算の児童自身の習熟状況を児童自身に明確に把握させることが不十分である。 ・教科担任制等により、授業時間外などにおける弾力的な補習や反復した指導が十分できていない。	⇒ 令和6年度さいたま市学習状況調査の結果と、学校課題研究のテーマを鑑みて作成したカリマネデザインマップを軸として指導を進める。そこに示した各学年重点単元において、児童による目標設定、学習方法の選択、振り返りを行うことで、自身の学習達成状況を客観的に把握させる。【カリマネデザインマップに示した重点を置いて指導する単元において実施。】
思考・判断・表現	<学習上の課題> ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」の力の定着 ・既習を生かした自力で考える学習や協働的な学習 <指導上の課題> ・児童一人ひとりに合わせた指導、支援の個別対応や、思考を広げる協働的な学習への効果的な取組につなげていく必要がある。	⇒ 学校課題研究と関連付け、個別最適な学び、協働的な学びを柱に据え、スクールタッチボード等の活用によって、児童の習熟度や達成度を把握し、個々の実態に応じた指導、支援を繰り返し行う。【カリマネデザインマップに示した重点を置いて指導する単元において行う振り返りを元として実施。】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能		①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等
思考・判断・表現		

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	
思考・判断・表現	

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、「我が国の言語文化に関する事項」において、理科では、「エネルギー」「生命」を柱とする領域において正答率が高く、授業改善の効果が見られた。一方、算数では、全体としてつまずきのある児童が多く、特に「数と計算」「測定」の内容について大きくつまずきが見られた。年間指導計画と比べてみると、近い時期に学習していたものについて正答率が高いことが伺えた。また、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」という質問について、100%の児童が肯定的に回答している。基礎的・基本的な内容に関する児童の苦手な内容について、一人ひとりの実態を教師が把握し、適切な指導・支援が継続されていることが伺える。
思考・判断・表現	算数・国語・理科の「記述式」の問題につまずきのある児童が多く見られた。一方、「分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」の問いに関しては、97%、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の問いに関しては100%の児童が肯定的に自己評価しており、日頃の授業で児童の実態に応じた授業改善や工夫が進められている成果の一部が伺える。ICT機器を活用した授業について、「友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」と肯定的に回答した児童が97%である。令和6年度から引き続き高い評価結果となっている。思考力・判断力・表現力の育成において必要となる「ICTを活用して児童同士で考えや意見を共有する時間」を学習計画の中に効果的に位置付ける授業改善の工夫が、学校全体で推し進められている成果が伺える。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)
③分析共有(児童生徒の実態把握)

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	C	児童による目標設定、学習方法の選択、振り返りを教科、学年の実態に応じて推進できている。一方、自身の力に合わせた適切な学習方法の判断、選択が難しい児童にとっては、授業内での基礎・基本の習熟が効果的に進んでいるとはいえない場合もある。学習したタイミングでは理解できている児童が多いことから、直接的に、基礎・基本に関する学習内容に反復して取り組んだり指導を要したりして、定着する学習活動の機会を設定し、実施する必要がある。	年度初めに設定した策に加え、特に基礎・基本の習熟を目指した練習問題に取り組む時間を朝のスキルタイム(毎週1～3回、15分間)として年間指導計画に位置付けることで、スキルタイムの確実な実施と毎時間変化する児童一人ひとりの習熟度に合わせた適切な課題を提供する。また、児童の苦手が増えることを予想される学習時には、スクールアシスタントの配置をその実態に応じて工夫し、支援を厚くする。
思考・判断・表現	B	重点を置いて指導する単元を適切なタイミングで学年や学校課題研究で組織された研究グループ内で確認するとともに、指導方法の工夫と実践を繰り返し行っている。一方、自身の力に合わせた適切な学習方法を、児童自ら判断、選択する力は短期間で身に付くものではないため、引き続き実施と見取りに努める。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【柏崎小学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	教科ごとの学習内容とスキルタイムの繋がりを系統性をより明確にし、年間指導計画に明記することで、いつでも誰でも一定の質を保ったスキルタイムが実施できるようにする必要がある。また、児童が自分の基礎的基本的な力の実態把握と課題設定を主体的に取り組む姿勢を培うために、さいたま市学習状況調査や単元の評価テストだけでなく、スキルタイムに取り組んだ内容をその場で評価する(自己採点、友達との相互評価等)活動を確実に実施していく必要がある。
思考・判断・表現	教員が各々の指導観に添った授業改善策を進めた成果が明確に児童の姿でみられる。(④、⑤に記載)一方、次年度は、前年度(令和6年度)に学んだ学習方法を児童が継続して活用することで、習得し、他教科や実生活にも生かせる姿を求めたい。そのために、学校全体で授業スタイルや児童の学習方法選択の支援策等の共通理解を図り、計画的に継続して実施していく。

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> ・基礎的、基本的な知識技能の力の定着 <指導上の課題> ・基礎的な読み、書き、計算の取組にける時間を十分に確保する必要がある。 ・教科担任制等により、授業時間外などにおける弾力的な補習や反復した指導が十分できていない。	⇒ 令和5年度のさいたま市学習状況調査の結果をもとに、各学年のスキルタイム(朝活動の時間)の内容を精選し、系統立てて、計画的に継続して取り組めるようにする。【スキルタイムを含めたカリキュラムマネジメントの実施。】
思考・判断・表現	<学習上の課題> ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」の力の定着 ・既習を生かした自力で考える学習や協働的な学習 <指導上の課題> ・児童一人ひとりに合わせた指導、支援の個別対応や、思考を広げる協働的な学習への効果的な取組につなげていく必要がある。	⇒ 学校全体の研修と関連付け、個別最適な学び、協働的な学びを柱に据え、スクールタッチボード等の活用によって、児童の習熟度や達成度を把握し、個々の実態に応じた指導、支援を繰り返す行う。【毎学期1つ以上、重点を置いて指導する単元を設け策を実施する。】

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	算数科・国語科の同集団経年比較(令和5年度第3学年～第5学年と令和6年度第4学年～第6学年)の結果として、第4学年算数科・国語科、第5学年国語科、第6学年算数科・国語科における学力の向上が見られた。教科担任制により教員の指導内容への理解が深まり、朝のスキルタイムにおける活動内容を児童の実態に即したものを実施し続けた成果が現れていると考えられる。
思考・判断・表現	B	算数科・国語科の同集団経年比較(令和5年度第4学年～第5学年と令和6年度第5学年～第6学年)の結果として、算数科における「データの活用」また、国語科における「話すこと・聞くこと」において、学力の向上が見られた。全教員が教科種関係なく、学校課題研究において「自分の力を明確に把握し、自らの学びを調整する力を児童に培う」ための授業改善を計画、実施、継続した成果が現れていると考えられる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	本校の正答率がさいたま市のものより高い問題区分は、6年生算数「図形・理科「大地」「生命」、5年生算数「データの活用」・理科「大地」「生命」、4年生算数「データの活用」「数と計算」、3年生国語「話すこと」「書くこと」などであった。年間指導計画と照らし合わせると、学習状況調査の直前に学習した内容であった。このことから、授業で学んだことを理解し活用することはできている一方、その力を継続することに課題がある児童が多いことが考えられる。
思考・判断・表現	生活習慣に関する調査項目35の「授業で、学級の友達とで話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていているか」と及び、項目36の「自分と違う意見について考えるのは楽しいですか。」の回答が、全学年で肯定的な割合がさいたま市平均を超えた。個別最適な学びと協働的な学びを一体的にとらえた授業計画、展開の継続が、児童の他者と関わり合うことへの肯定的な価値観を育み、思考力、判断力、表現力の伸長につながっていると考えられる。

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	算数では、「計算に関して成り立つ性質を活用して、計算の仕方を考察し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる」「直径の長さ、円周の長さ、円周率の関係について理解しているかどうかをみる」問題において、つまづきのある児童が多く見られた。一方、それ以外の問いにおいては、授業改善やスキルタイム等の効果もあり、一定の成果が伺える結果となっている。また、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分るまで教えてくれていると思いますか」という質問について、98%の児童が肯定的に回答している。基礎的、基本的な内容に関する児童の苦手な内容について、一人ひとりの実態を教師が把握し、適切な指導・支援が継続されていることが伺える。
思考・判断・表現	「目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる」「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる」問題において、つまづきのある児童が多く見られた。一方、「目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる」問いに関しては、学習計画を児童の実態に応じて工夫した成果もあり、力の伸びがみられた。ICT機器を活用した授業について、「友達と意見を共有したり比べたりしやすい」「友達と協力しながら学習を進めることができる」と肯定的に回答した児童が100%である。思考力・判断力・表現力の育成において必要となる「ICTを活用して児童同士で考えや意見を共有する時間」を学習計画の中に効果的に位置づけ続けた成果が表れ、児童が一人も取り残されずに、学習活動に主体的に参加できている実態が伺われる。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

③分析共有(学年・教科種関係なく)

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	スキルタイムの系統的な指導に合わせて、児童一人ひとりの習熟度を各担任が把握し、適切な課題をスキルタイムに取り組ませている。	変更なし
思考・判断・表現	C	重点を置いて指導する単元を設け、児童が、主体性をもって協働的な学びを展開することはできている。一方、個別最適な学びの実現に向け、児童の実態に即した適切な学習方法を、児童自ら選択することについては、まだ課題である。	自分の力を明確に把握し、自らの学びを調整する力を児童に培うために、学校課題研究の時間を主として、「目標設定」「学習方法の選択」「振り返り」の3つの視点から授業改善策を立案し、実施する。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)